

二つの「怪童物語」を追って

——ペレドゥルと金太郎——

中 野 節 子

古今東西を問わず、世界の各地には人々が賞賛してやまない強く力ある人物が存在し、彼らの幼少時代を語る、並はずれた体力や技量を持った子どもの物語、「怪童物語」が残されている。

ここでは、西洋と東洋の二つの国、ウェールズと日本で、人々の間で人気のある二人の人物を取りあげ、彼らの幼いころの活躍ぶりを伝える一種の「怪童物語」に焦点を当てながら、その特徴を探ってみたい。両者ともに、さまざまな時代を生きのびて、独特の変容を遂げた国民的人気者である。

I ウェールズの「怪童」―ペレドゥル (Peredur)

ペレドゥルは、中世ウェールズに生まれた散文物語集『マビノギオン』(*Y Mabinogion*) (c. 1300-1425) に収められている「三つのロマンス」('Tair Rhamant') のなかのひとつ、「エヴラウクの息子ペレドゥルの物語」('Historia Peredur vab Efrauc') の中に登場する主人公である。他の二つのロマンス、「泉の貴婦人の物語」('Chwedyl Iarlles Fynawn') 又は「オワイン」('Owein')、「エルビンの息子ゲライントの物語」('Chwedyl Gereint vab Erbin') と同様、「アーサー王物語」に関するさまざまな事件を扱っている物語である。12世紀のフランスの詩人クレティアン・ド・トロワ(Chrétien de Troyes)の韻文で綴られた物語詩、『ペルセヴァル』(*Perceval*) (c. 1182) とほとんど同じ内容が語られている。しかし両者には、当然大きな違いもみられる。ウェールズの「ペレドゥル物語」においては、クレティアンの物語詩の主要なテーマ、後に大きな独立した物語群へと発展してゆく「聖杯探究」の主題が、明確に語られることはない。そのため、これらの物語は、同じ資料を使いつつも、フランスとウェールズという異なった二つの地方で、それぞれ独自の物語として、まとめられたと考えられている。「ペレドゥル物語」の中では、「聖杯」に代わって登場するのは「平皿に載せられた生首」となっており、女帝とともにコンスタンティノーブルの地を14年間にわたって治める話などは、完全にウェールズ独自のものである。物語の進行の様子にも、大きな違いが見られる。

ウェールズの「三つのロマンス」に共通した特徴は、『マビノギオン』に登場する初期の「アルスルの物語」とは違って、アルスル(Arthur)の宮廷がコンウォールのケシ・ウィッグ(Celliwig)から、カエル・レオン・ウスク(Caerleon ar Wysg)へ移されていること、アルスル自身の姿はすっかり表舞台から消え、その冒険の数々が専ら家臣となって活躍する戦士たちによって成し遂げられていることなどである。物語が展開する背景となるはっきりとした地域も記されてはおらず、すべては現実とは離れた、夢のような世界での物語として語られている。

「三つのロマンス」に共通のテーマは、ひとりの若者が旅を志し、冒険を求めて彷徨するといっ

たものである。そこには、数々の試練を解決しながら、成長してゆく主人公たちの姿が描かれている。しかし「ペレドゥル物語」には、他の二つとは大きく異なっているところがある。この物語で、主人公のペレドゥルが始める旅は、1人の素朴な田舎者であった若者を、見事な騎士へ成長させるという意味を持って綴られているのである。その過程で、ペレドゥルは理想の女性アンガラッド（Angharad）の愛を勝ち得、コンスタンティノーブルの女帝の信頼も手に入れて、女帝とともにその地を治めるようになる。最後には、もっとも難しい冒険、「不思議の城」（‘Caer yr Enryfedodan’）への旅を成し遂げ、そこに住む9人の魔女たちを亡き者にして、自分の一家の仇も討つという物語となっている。物語の進行は、必ずしも一貫してはおらず、途中でさまざまな奇妙なエピソードが織り込まれていて、整合性に欠ける嫌いはあるものの、純粋にケルト的要因を含んだ物語と見なされている。

「ペレドゥル物語」は、『レゼルフの白い本』（*Llyfr Gwyn Rhydderch*）（c. 1300-25）『ヘルゲストの赤い本』（*Llyfr Coch Hergest*）（c. 1375-1425）のなかに、完全なかたちで残されている。また、これらの写本に先行する未完の原稿「ペニアルス 14」（‘Peniarth 14’）（c. 1300-50）が現存する。このテキストは、ペレドゥルが第二の叔父の宮廷を訪れるところで、突然に終わる。また、もう一つの先行文献「ペニアルス 7」（‘Peniarth 7’）（c. 1300）は、最初の段落を欠き、主人公の若者がコンスタンティノーブルの女帝とその地を治めるというところで、突然終わっている。これらはともに、より古くからある物語を語っており、口承で伝えられていた頃の名残をとどめる文献と見なされる。その後の時間の経緯の中で、未解決となっていた出来事を語る物語が次々に付け加えられて、最終的に、この「ペレドゥル物語」として、完成されていったのだろうと考えられる。

「ペレドゥルの物語」は、一人の少年の登場を次のように語っている⁽¹⁾。

この子には、賢くて考えぶかい母があった。

彼女は、息子と所領のことを思いめぐらしていた。思案のすえ、息子といっしょに人気のない荒れはてた荒野に逃れて、そこで暮らすことにした。身のまわりには、女と子ども、それに、戦いや戦争にはむかない心穏やかな人だけを置いていた。息子の耳に入るようなところでは、だれ一人として、軍馬や武具のことを語る者はいなかった。息子の心がそんなものに傾いてしまうことを恐れたからだった。だから、少年は毎日、深い森に出かけて遊んだり、柊でつくった投げ矢を投げたりして過ごしていた。（275-6）

しかし、やがてこんな平和な生活にも変化の兆しが訪れる。

ある日のこと、少年が母親の持ち物の山羊の群れを見ていると、山羊たちのそばに、二頭の雌鹿がいるのが目に入った。少年は、これら二頭の角のない動物と、みんな角をもっているかたえの動物たちとを見くらべて、驚いて立ちつくしていた。それから、彼らは長いこと迷子になっていて、そのため角をなくしてしまったのだろう、と考えた。そして、力強く速い脚力にものを言わせて、森はずれにある山羊小屋へ雌鹿たちを追い込んだ。

それから、少年は家へ帰ってきたのだった。

「母さま」と彼は言った。「この近くで、へんなものを見つけちゃった。二頭の山羊が、正気をなくして森の中を長いことさまよったせいで、角をなくしてしまったらしいんだ。そいつらを小屋へ追いこむの、とてもたいへんでしたよ」

そこで、みんなが腰をあげ、それを見にやってきた。鹿を見ると、彼らを追いこむことができる力と速い足をもっている者がいることに、心から驚いたのだった。(276)

このように、エヴラウク (Efracw) 伯爵の7番目の息子ペレドゥルは、物語の中で、まだ物事もしっかり理解できないくらい幼い、元気な少年として登場する。少年の考え深い母親は、夫と6人の息子たちをいずれも戦いのなかで亡くしてしまったのちに、人里離れた荒野に逃れ、手元に残されたこの子だけとは、戦いに関係のない女性たちやおよそ戦闘などとは無縁な穏やかな人々の間で、大切に育てる。そのため少年は、戦いに必要な武具だとか軍馬のことなどは一切知ることなく、毎日、深い森の中で遊んだり、柊で作った投げ矢を飛ばしたりして過ごしていた。ある日、少年は母の飼っている山羊の側に二頭の雌鹿がいるのを見つける。初めて目にしたこの動物を追って、少年は雌鹿たちを森のはずれにある、山羊のための小屋に追い込んでしまう。これを見て人々は、あらためて少年の足の速さと力強さにすっかり驚いた。そのすぐあとで、少年は森のわきの乗馬道を通してゆく騎士たちの姿を目にした。彼らはアルスル (Arthur) の宮廷からやってきたグワルッフマイ (Gwalchmei)、グウェイル (Gweir)、そしてオワイン (Owein) の3人であった。母親はとっさに、彼らは「天使」たちだと嘘をつくものの、少年はこのときはじめて、世の中の「騎士」という人たちの存在を知ることになり、すぐに騎士たちを追おうと決心する。そんな息子に、母はいくつかの助言を与えて送り出す。こうして少年ペレドゥルの旅が始まった。

母が息子の与えた、次のような助言はそれぞれに興味深いものである。

1. アルスル (アーサー) の宮廷へ向かうように
2. 教会を見たら、祈りを唱えること
3. 食べ物や飲み物を見たら、とっておくこと
4. 叫び声を聞いたら、すぐに駆けつけること
5. 美しい宝石を見たら、とっておいて他の人にあげること
6. 美しい女人を見たら、愛を捧げること

ペレドゥルは、これらの母の助言を胸に旅を続け、アルスルの宮廷にやってくる。宮廷の騎士たちは、今まさに1人の騎士によって、王妃グウェンフォヴァル (Gwenhvyuar) に加えられた侮辱を、どう晴らしたらよからうかと動揺しているところだった。非礼を働いたこの騎士は、どうみても簡単に討ってとれるような相手とは思われず、自分たちにその役目が命じられはしまいかと恐れて、並み居る騎士たちは全員顔を伏せていた。まさにこのとき、乗っている馬といい、持っている馬具といい、ずいぶんとだらしのない奇妙な風体をした若者が現われたのだった。しかしアルスルの宮廷の第一の騎士と自認する誇り高いカイ (Cei) は、騎士になりたいというこの若者の言葉にすっかり腹を立ててしまう。願いをかなえてもらいたいなら、「今この宮廷を出て行った騎士の無礼を晴らしてこい」と言われ、ペレドゥルはその騎士を倒しに出てゆく。少年はいともたやすくこの騎士を打ち負かしてしまった。次に、ペレドゥルは、宮廷で自分の到来を歓迎してくれた唯一の人々、宮廷に逗留していた男女の小人たちに対して、カイが加えた無礼な振る舞いを晴らすべく旅を続ける。ペレドゥルの数々の武勇談は、その都度、アルスルの宮廷に報告された。

こうして旅を続けるペレドゥルに大きな転機をもたらしたのは、母方の二人の伯父たちとの遭遇という出来事である。

第一に訪れた伯父の城で、ペレドゥルは二つの忠告を受ける。ひとつは「今や母親の言葉を離れ

るときだ」という忠告、そして二つ目は、「何か奇怪なことを見ても、それを自分では追求しないこと。そうはしないで、親切に教えてもらうまで待つのだ」という忠告である。ペレドゥルはまたこの叔父から、騎士になるのにふさわしい武術、行儀作法の手ほどきを施してもらう。この白髪の叔父の居城は森のはずれの湖のほとりにあり、叔父は片足を引きずって歩いていたと描かれている。明らかに、「聖杯伝説」に登場する「漁夫王」(‘Fisher King’)のイメージである。この叔父の忠告の意味は、のちに触れる。

次に巡り合うことになった第二の叔父の住まいは、森のはずれの大平原にあった。ペレドゥルは、この伯父の邸宅の広間で、次々に展開される不思議な場面を目撃する。

すると、二人の若者が広間に入ってきて、まっすぐ部屋へと進んでくるのが見えた。とてつもなく大きな槍を持ち、その槍の口金の部分からは、三筋の血潮が床へ流れてた。このようないでたちで若者が入ってくるのを見ると、一同は叫び声と悲しみの声を上げたので、耐えがたいほどになってしまった。(289)

しかしながら、この伯父は何事もないかのように会話を続け、目の前で展開されている異様な情景については何の説明もしない。ペレドゥルもまた、第一の伯父の忠告に従って、敢えて問いを発することはなかった。

それから、しばらくはしんと静まりかえったあとで、見よ、二人の乙女が入ってきた。大きな金属製の盆を持ち、その盆の上には男の首が載っており、首のまわりには大量の血が流れていた。そしてまた一同が悲鳴と叫び声をあげ、この家の中で、彼ら二人と同じように平然としていられる者はいないという状態になった。(289-290)

さすがに今度は、伯父とペレドゥルも会話はやめたものの、思う存分腰を落ちつけて飲み飲んだ末、その晩は何事もなかったかのように、そろって眠りにつき、翌朝ペレドゥルは、一言も問うことなく、伯父のもとを出立してゆくのである。

この物語には、フランスのクレティアンの韻文物語やドイツのエッシェンバッハ (Wolfram von Eschenbach) の『パルチヴァール』(*Parzival*) (c. 1210) 等に登場する、宝石をはめ込まれて金色に輝く、壮麗な「聖杯」の影は微塵も感じられない。代わってそこに綴られているのは、平皿に載せられた血染めの生首の壮絶なイメージのみである。その後、ペレドゥルの最後の旅となる「不思議の城」への旅の様子が語られて、この異様な光景の持つ意味についての秘密が明かされる。

第二の伯父の城で、ペレドゥルは足の悪い白髪の男を目にした。彼は、明らかにペレドゥルが最初に遭遇した、第一の伯父である。ここにはまた、カイと並んで、アルスルの宮廷の騎士の一人、ゲアルッフマイの姿も登場してくる。そのときペレドゥルの前にひざまずいた黄色い髪の若者が、自分は、ペレドゥルがアルスルの宮廷で出合った黒い乙女であると告白し、次のように続ける。

「……また、この私が、血だらけの首を盆に載せて運び、切っ先から握りのところまで血が流れている槍を持って歩んだのです。あの首は、あなたの従兄弟の一人のもの。彼を殺したのはカエル・ロイウの魔女たち。あなたの伯父を足なえにしまったのも、あの魔女たちです。そして私は、あなたの従兄弟にあたる者なのです。あなたがこうして仇を返してくださることは、前もって予言されていたのですよ」。(343-4)

この若者が言及しているのは、明らかにペレドゥルが第二の伯父の城で目撃した、あの不思議な光景のことである。しかし、ここには二人の伯父が入れ替わっているという矛盾も見られる。事実を知ったペレドゥルとグアルッフメイは、ただちにアルスルと彼の軍勢の助けを依頼し、カエル・ロイウ（Caer Loyw）の9人の魔女たちをすべて殺し、ペレドゥルはめでたく仇を討ったと物語は語る。

このように、ウェールズの「怪童物語」,「ペレドゥルの物語」は、一人の若者が、数々の試練を乗り越えて、一族の仇討ちを成し遂げる「英雄」となったことを語る物語となっている。

ペレドゥルという主人公は、『マビノギオン』の他の物語の中にも、二度登場してくる。一つは、第8話の「ロナブイの夢」（‘Breudwt Ronabwy’）の中の、アルスルの42人の相談役一人「長槍のペレドゥル」（‘Peredur Paladyr Hir’）として、そのリストにあげられている（233）。もう一つは、「ゲライント物語」で、父の国に帰ることになったゲライントに付き添う19人の従者の一人「エヴラウクのペレドゥル」として登場している（372）。

II 日本の「怪童」—金太郎

熊にまたがり、鉞をかつぎ、中央に「金」の字が書かれた腹掛けをかけたぼっちゃりとした風貌の男の子。これが、「桃太郎」や「牛若丸」と並んで、日本の庶民の間で今も愛されている「怪童」の一人、「金太郎」の姿である。人々はその人形を五月の節句に飾り、唱歌をうたい、「金太郎飴」を楽しむ。

金太郎は、坂田金時という人物の幼年時代の名前である。しかし、この金太郎という名は、実在のものではなく、江戸時代の庶民が創り出した架空の名であった。そもそも、坂田金時（公時）その人の伝記さえもが明確にされてはいない。平安中期（976年）の『前太平記』に、最初に金時の名が登場し、『今昔物語集』（1120年頃）に、初めての逸話が残っているにすぎない。坂田という苗字自体、江戸時代になってからのものである。

金時が仕えた源頼光なる人物は、清和天皇三代の子孫、鎮守府將軍忠満仲の嫡男である。摂津・伊予・美濃・上総などの国司を歴任し、正四位下という高い地位に至る貴人であった。「歌人で武略に通じた人」という評も見られはするが、専ら武勇を語る説話の主人公としての評価が高い。注目すべきことは、頼光やその家来たちの武勇談が、鬼神や妖怪退治に関するものがほとんどという点である。この事実が、やがて金時が、山の神、山姥の子として生まれた人だったという怪奇性をもつ基底となったと考えられる。『古今著聞集』（1254）に頼光と四天王の盗賊退治の話が収録されており、室町時代に広く普及した御伽草紙「酒吞童子」において、金時は、庶民に親しまれる剛勇の武士として、四天王の一人となる。

以上見る如く、この金時なる人物は、足柄峠の南の金時山に生まれ、そこで少年時代を送ったあと、頼光に見出されて上洛し、成人となったのちに坂田の金時（公時）を名乗り、渡辺綱・卜部季武・碓氷貞光らと共に、源頼光の四天王として、大江山の酒吞童子退治等で活躍し、頼光が亡くなった後、再び足柄山に帰って、跡をくらましたという。

次に、人気者「金太郎」という怪童は、いったいどのように登場し、どんな人物として描かれているのだろうか。詳しくその推移を探ってみたい。

(1) 平安時代（774-1185）

『前太平記』（976）という書物に描かれている一人の子どものイメージが、「金太郎」を思わせる

人物が最初に登場する文献である。そのなかでは、源頼光なる武将が、足柄山で一人の童子を見つけ、その童子が「金時」と名乗ったと記されている。

また、日本最大の古代説話集『今昔物語集』(c. 1120) 28 巻には、加茂の祭りを見物する「公時」なる人物が記載されている。

しかしながら、続く鎌倉時代(1185-1333)には、この人物をとどめる文献は見つかっていない。

(2) 室町時代(1392-1573)

この時代になると、日本のさまざまな文芸が誕生してくる。

「能」の謡の部分、「謡曲」のなかの、世阿弥の『山姥』(1336 頃)は、それまで各地に広く伝承されてきた山姥伝説、さまざまな事情から、未婚で子どもを生んだ女が山に身を隠して生活し、山妻となり、神の子を産んで、「山姥」と称されるようになったという、女性にまつわる伝説を、吸収統合して文芸化した作品であった。この謡曲『山姥』に現れる山姥は、遊女あがりの女芸人が山中であう老女とされている。

(3) 江戸時代(1600-1867)

戦乱に次ぐ戦乱の末、ようやく平穏な社会を享受し始めた江戸時代においては、さまざまな文芸が人々の間に広がっていった。そんななかで、「金太郎」の大活躍が始まるのである。

金平浄瑠璃

三味線の伴奏を伴って語られる「語り物音楽」の一種、浄瑠璃の始まりは、室町末期と考えられている。初めは無伴奏、ときには琵琶や扇拍子がついて語られた物語のことを、浄瑠璃と呼んでいたと思われる。江戸時代の直前に、三味線が伴奏楽器として定着し、同じ頃に人形芝居と、またその後は歌舞伎とも結合して、江戸初期以降、上方でも江戸でも、庶民的娯楽として大いに流行した。さまざまな形態をとるもののなかで、江戸時代初期に人気があった金平節の古浄瑠璃で、金時の幼年時代の物語が盛んに語られてゆく。分かっている最古の作品は、『源氏のゆらい』(1659)であり、これに続いて、『金平たんじょうき』(1661)、『金時都入り、すくねの悪太郎』(1664)などが生まれている。

天下分け目の戦いといわれる関が原の戦いのなか、1600 年頃になると、太夫による語りとそれを演じる人形、さらには語りを伴奏する三味線との三要素が結合し、三者の共演合体による芸能として民衆の前に現れたのが、この浄瑠璃であった。したがってこの 1600 年という年は、江戸時代の始まりという画期的な年であるとともに、浄瑠璃が「浄瑠璃節」という中世的な音曲芸の時代から、「繰り浄瑠璃」という、江戸時代の民衆芸能として産声をあげた、記念すべき年でもあったのである。

「繰り浄瑠璃」は爆発的な人気をもって、人々の間で広まってゆく。しかしその演目はというと、新しいものがすぐに創作されたというまでには至らず、専ら中世以来の物語に材を求めた演目が、繰り返し上演されていた。まったく新しい浄瑠璃の創作は、金平浄瑠璃の最盛期(1661-72)の頃からである。

ようやく戦乱の時代が終わり、太平の世を向かえていたとはいえ、封建政治の圧迫はしだいに強まり、一方では謀反人や反乱者も現れる物騒な世となっていた。そんな世情のなかで、この浄瑠璃においては、伝統に束縛されず、自由闊達かつ勇敢に権威に立ち向かってゆく若者像が造形され、民衆の人気を集めるようになった。

『源氏のゆらい』には、「ちよ若」という若者が登場し、15 歳で頼光の家臣となって、「坂田民部金(177)

時」と名乗るということになっている。文芸作品の上で、金時の苗字を「坂田」と記しているのはこれが最初と思われる。やがて、底抜けに明るく、果敢に権力に向かってゆく澆刺とした若者が登場してくる。これこそが、金時の子、「金平」であった。こうして古浄瑠璃に台頭してきた若者ブームは、庶民の夢を背負って登場したこの怪力無双の金平の活躍で、庶民の間で空前絶後の人気者となる。また、この「金平浄瑠璃」の中では、金平の仕える、源頼光の子の源頼義が、源家の棟梁として天下の守護にあたっている。源氏の姓を名乗ることで格付けをした徳川将軍の地位が、この源頼義に仮託されているとも考えることができ、そんな意味から言っても、金平という若者は、徳川の世を守る英雄であった。

金時の出生について、「鬼女山姥の子で山中に暮らしていた」と明確に語られるようになるのは、『公平たんじょうき』という浄瑠璃の中でのことである。やがて登場する、金時の子としての‘すくねの悪太郎’という人物が『金時都入り、すくねの悪太郎』という浄瑠璃の中で活躍する。こうして、頼光四天王の中では、ただ一人金時だけが、民衆の中で、少年時代のイメージをふくらませて、生きつづけることになった。

『前太平記』の頼光・金時伝説

それからかなりの年月がたった頃（1687-92）に書かれたと目されている史書『前太平記』巻16には、金時が山中で頼光に見出される件が詳しく記されている。頼光は、任期満ちて上洛の際、通りかかった足柄山の山中で、赤色の雲気があるのを見て、漢の高祖の妻呂后が、山中の雲気によって高祖を探し出したという故事を思い合わせて、優れた人物が山中に隠れていることを知り、従者渡辺綱に搜索を命じる。綱は、奥深い山中の萱屋に、60歳余りの老女と20歳ばかりの童形の子を見出し、頼光のもとに連れて行く。頼光の問いに、老女は、この子は父のいない子で、自分が山頂で眠っていたとき、夢中に赤龍来たって孕んだ子であり、雷鳴が激しく響き渡って目が醒めたと語る。この子は生まれてから21年が経ち、成長するにつれて山岳を自由に駆けめぐり、巨石を軽々と持ち上げ、勇猛な心意気を持つようになったのだと告げる。漢の高祖の誕生を語る故事を思い出した頼光は、老女の子が凡人でないことを感じて、この子を従者とし、「酒田の金時」という名を与えたと記されている。これでも明らかなように、金時誕生の物語りは、『史記』に残されている高祖誕生の物語の日本版として語られ、普及した話と考えられる。

ここに綴られている金時誕生の物語はまた、庶民向けに作られた半紙大の五色摺りの絵本、『公時一代記』（1789-1800）として刊行されている。その後刊行された『前太平記図会』（1803）は、『前太平記』の名場面を見開きの絵にして、簡単な説明を付した、半紙大の庶民向けの絵本であった。

やがて、金時の幼年時代は、「怪童丸」として、江戸時代中期の草双紙や絵本で盛んに取り上げられるようになり、さらには浮世絵でも、「怪童丸」、「快童丸」、「金太郎」という画題で、描かれてゆくようになった。

近松門左衛門の『こもち山姥』

60歳の最も脂の乗り切った頃の、当代一の人気戯作者、近松門左衛門の『こもち山姥』が、大阪の竹本座で上演されたのは、1712年7月15日のことである。

近松は、15世紀の世阿弥の手になると考えられる、それまで伝えられてきた山姥伝説を文芸化した謡曲「山姥」、そしてまた「金平浄瑠璃」や『前太平記』等に語られてきた頼光・金時説話なども取り込んで、複雑な時代浄瑠璃へ書き直している。‘怪童丸’の代わりに‘快童丸’という表記が用いられるのも、この『こもち山姥』が最初のことであった。以後、この‘快童丸’の名が、草双紙に引き継がれ、所作事の「山姥もの」や浮世絵で、盛んに使われるようになる。‘怪童丸’がふた

たび登場するのは、寛政期（1789-1800）の浮世絵流行以後のことであった。

近松の『こもち山姥』では、『前太平記』では21歳とされていた山姥の子は、まだ母に乳をせがむ5・6歳の童子とされている。そこでは、大人そこのけの大力をもつ野生児‘快童丸’の愛らしさが強調されて描かれており、その二面性が対照を成している。この愛らしい怪力の童子のイメージが、その後の歌舞伎や歌麿の美人画の題材となって定着してゆく。草双紙・絵本・浮世絵・豆本などでは、‘快童丸’の力わさが動物相手に発揮され、「怪童」ぶりを示す中心的なイメージとなる。平和な時代となった江戸中期の価値観にしたがって、怪異性が弱まったとも考えられる。こうして強さと愛らしさの二面を持った童子の姿が、‘快童丸’に重ね合わされて、人々の間に定着してゆくのである。

そんな意味から言っても、近松門左衛門の功績は、計り知れないほど大きい。

草双紙・絵本の中の‘快童丸’

金時の幼名が「金時」となり、朱色の体に童髪で鉞を持ち、動物を相手に山中で遊ぶ姿が文芸の中に登場するのは、江戸時代中期の中頃から刊行された、草双紙や絵本の中でのことである。

そのもっとも早い例は、赤本『きんときおさなだち』(c. 1751)という草双紙に登場する山姥である。鬼面の老婆の姿に描かれた母親に比して、童子の方は背中に‘快’の字が染め出された衣服を身に着けている。このように、‘快童丸’は、常に猪に乗った姿で登場し、山中で猿・兎・狐などの小動物に囲まれて、その怪力を畏敬され、彼らを統率して遊ぶ、組織力をもった動物たちの仲のよい友だちとして登場する。雷に対して特に威力を発揮し、雷をとらえ、懲らしめている場面などが滑稽に描かれている。

これより約20年後に刊行されたと思われる黒本『つわもののまじわり』では、童子が身につけている衣服に、大きく丸に‘金’の字が書かれ、‘快童丸’は‘金太郎’となり、‘坂田金太郎’という人物名が明記されている。そして、以後の草双紙では、この‘金太郎’の名が踏襲されるようになってゆくのである。

浮世絵の金太郎

草双紙最盛期の寛政年代、金太郎が浮世絵の題材として盛んにとり上げられるようになった。

もっとも作例の多いのは、鳥居清長の約40種、そして喜多川歌麿の数10種の金太郎絵であり、この他にも歌川富国、葛飾北斎、歌川国芳などが、多くの金太郎絵を残している。

足柄山の山中で、けだもの相手の勇猛ぶりが描かれる絵には、髪をお河童にし、全身朱色で、腹掛をつけ、衣服を着たり、ときには全裸の金太郎が登場する。鉞をもったり、熊に乗ったり、熊を投げ飛ばす姿が描かれ、また後の時代になると、大きな鯉を素手でつかむ図なども現れるようになる。こうした、力技が強調して描かれる場合には、画題に‘怪童丸’の文字が使われているのが分かる。中でも、鳥居清長の金太郎絵は、特に芸術的にすぐれていると評価されている。そこには、動物たちと楽しげに遊び、明るく愛らしく、健康で生き生きした、気品のある少年としての金太郎が描かれている。母の山姥の姿はなく、鉞をかついで熊に乗る金太郎の姿が、鮮明に造形されている。

天保中期（1835年頃）に描かれたと思われる、歌川国芳の「坂田怪童丸」は、鯉を掴む勇壮な「金太郎絵」である。鯉が、黄河にある竜門の急流を逆のぼって、竜になるという故事から思いつかれたもので、滝登りの鯉を素手で掴む男児の勇姿を描いており、そこには、男児の成長を祝福する意味合いが含まれている。

足柄山で、金太郎をあやす美人の山姥が描かれるのは、寛政後期（1795-1800頃）の喜多川歌麿の作品からのことである。この美人画に登場する山姥は、怪奇感を漂わせながらも、妖麗な情感を誘う女性の美しさを強調して描かれている。蓬髪で、木の葉を綴った衣服をまとった若い美女姿の



図版1 山姥と金太郎

喜多川歌麿，寛政中期（1798 年頃）

山姥が、我が子金太郎をいつくしみ、あやしているという図柄が多く見られる。その中でも、「山姥と金太郎」は、歌麿美人画中の傑作という誉が高い作品である。江戸時代の中期には、年の初めに、子どもの一年間の健康と立身出世を祈願する縁起物として愛用された、新春の目玉商品のひとつであったことが分かる。

金太郎の持つ鉈は、これらの浮世絵によって定型となった。こうして、恐るべき鉈をもった雷神との関係を、象徴的に示す金太郎のイメージが、五月人形の定型となって、一般の庶民の間に定着する。

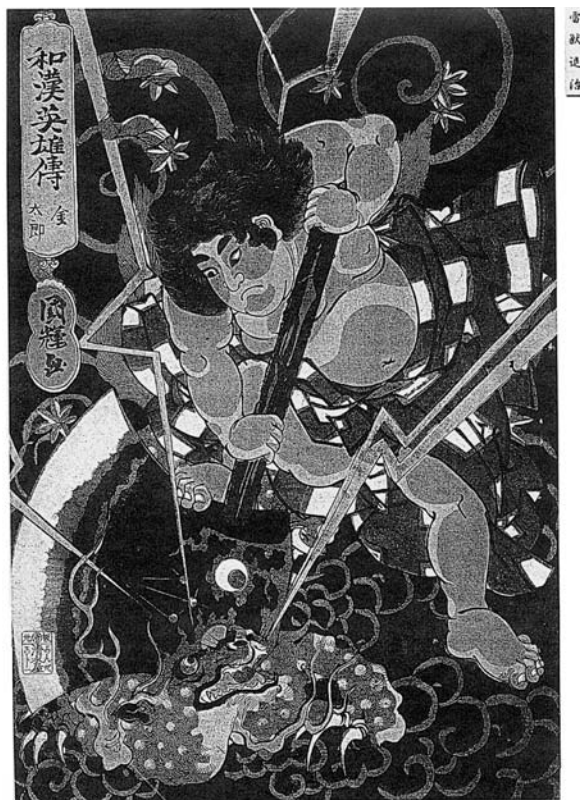
(4) 明治時代（1868-1912）

豆本・昔話・唱歌の中の金太郎

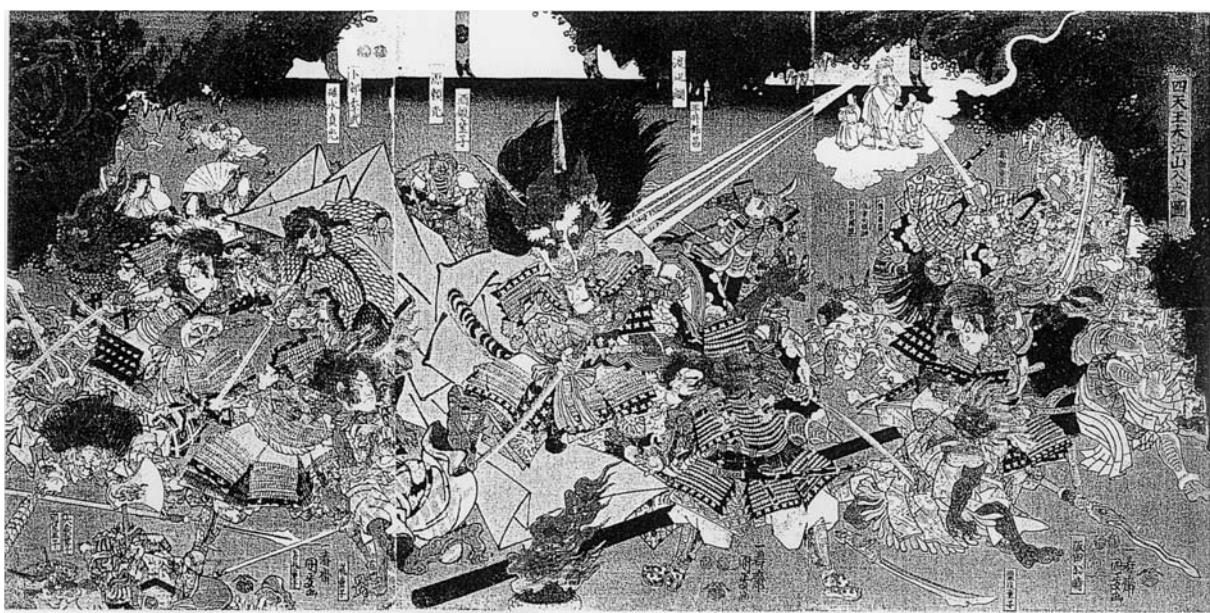
幕末から明治初期にかけて、小型（縦 13 cm，横 10 cm）の、7 枚前後の‘豆本’と呼ばれた子ども向けの小さな絵本が、盛んに出版される。そこで描かれる金太郎の姿は、力持ちで、妖怪退治な



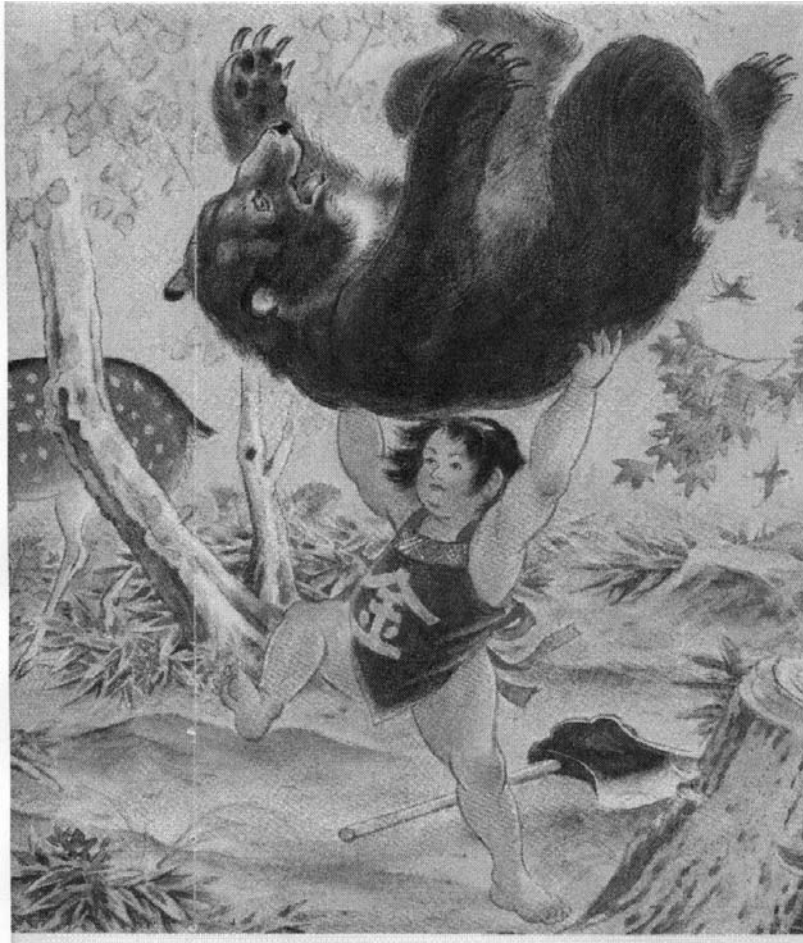
図版 2 坂田怪童丸
歌川国芳，天保中期（1835 年頃）



図版 3 和漢英雄傳
歌川国輝，天保中期（1835 年頃）



図版 4 四天王大江山入之図
歌川国政，嘉永頃（1850 年頃）



図版 5 金太郎

米内穂豊画，昭和 10 年代（1935 年頃）

どで人のために尽くし，やがては立派な武士となって立身出世するという「英雄物語」の主人公となっている。

明治 20 年頃から，巖谷小波らによって，日本昔話のひとつとして「金太郎」が再生され，児童の読み物として普及していった。小波の「金太郎」が，教訓性という出版意図を超えた，魅力あふれる子どもとなって，人々のアイドルとして定着してゆくのである。

この小波の『金太郎』（1896）の出版から数年後に，唱歌「キンタロー」が小学校の音楽教材に取り上げられ，広く普及していった。足柄山の山奥で，動物たちを集めて相撲を取ったり，熊にまたがって山中を闊歩する金太郎の姿が子どもたちの夢を誘い，広く唄われていった。

こうしてみると，明治期の金太郎像には，山姥から生まれたときの怪奇性はすっかり消えてしまい，強健と武勇の面が強調されているのが分かる。まさにこの時代が求めていた，理想的な男子の姿になっているのである。こうして，金太郎に，近代国家として世界に乗り出していこうとした明治期の願望が担わされることになった。

以上見て来たごとく，日本の「怪童」，金太郎像は，長い年月をかけて，さまざまな要素が交じり合った重層性の中で作り出され，民衆の中に定着してきた人物であったことが分かる。金太郎という子ども像は，日本の祖先の持っていた信仰やそれに根ざす伝承を基礎としながら，文芸や芸能，

絵画や音楽などの文化的営みが複雑に絡み合いながら育てられ、人々の間に深く根を下ろし、日本の文化的風土の中に生まれ育った民族的アイドルであった。

Ⅲ 二人の「怪童」―ウェールズのペレドゥルと日本の金太郎

このようにウェールズと日本の地に残された「怪童」の物語をたどって見ると、かずかずの共通した要素もあるものの、そこには明確な違いがあるのがはっきりしてくる。

(1) 狩猟民の英雄像と農耕民の求める「怪童」

ウェールズのペレドゥルの子ども時代の特徴は、その足の速さや投げ矢の上手さにある。一方、日本の金太郎の特徴は、その力の強さや動物たちを仲間にして統率するということに置かれている。これは、元来、野山を逍遥して、狩猟を生活の糧を得る手段として暮らしていたウェールズの社会と、ひとつの地に定住して、農耕を営んで暮らしていた日本の社会で重んじられていた能力の違いを表すものと考えられる。農耕社会においては、協調性と組織力が最も必要とされることだからである。

金太郎が山姥の子となっているところも、不遇をかこつ若い女性に対する、素朴な里の人々の配慮であり、神の子を産んだ山妻^{やもめ}として遇したということの背景には、毎年、農作の行なわれる季節ごとに、本来は山にいます「山の神」がしばらく「田の神」となって降臨し、人間の娘と交わって懐胎させるという信仰が、各地に残っていたことによる。

もともと「ちはやぶる」、すなわち荒ぶる神としての雷神は、神そのものの姿であり、雷は火の母体であり、また水の源泉でもあった。このような考えから、赤竜・赤蛇をもって雷神を表象することが多く、奈良県に残る三輪山式神婚説話は、その一例と考えられる。苗の植付けのとき、人々が待ち焦がれるのが、多量の雨であった。その後の稲の成長を促す「日の神」（太陽）と「火の神」（雷神）とは、同じ「天なる神」の、平和と憤怒の半面をそれぞれ表している。天なる父神は、田植えの時期になると、赤竜・赤蛇の姿をとって、天下る。こんなところから、天から降りてくる、赤い逞しい天若御子としての金太郎像が生まれたと考えられる。金太郎と鉦との関係も、古代から雷神が、その手に雷火（斧）を手にして現れるということから生まれたものであろう。ギリシア神話の大神ゼウスも、その手に雷火を持つ雷神として描かれており、人間の世界に下りてきて、子孫を残す話のなかに登場してくる。いつまでも未成年の如く若かったといわれる酒の神バックスも、このゼウスの息子であった。彼がぶどう栽培の創始者であり、秋の天恵を代表する神であるという点は、日本の稲を実らせる稲光との関係に類似している。農耕が、まず女性の手によって開拓され、発達したということも、万国共通の考え方なのである。このようなことから考えても、金太郎は、まさに稲作民族の「怪童」であった。

一方、狩猟民族から発したウェールズのペレドゥルは、そんな社会で最も重んじられた能力、動物を追いつめる脚力や矢を射って仕留めるための投打の能力に優れた怪童である。そして自分の領域を広げるために、果敢に外の世界へ打って出る英雄となっている。それに反して、農耕社会の怪童である金太郎は、農耕作業に必要とされる腕力に優れていて、まわりの動物たちを懐柔する能力を有していたと描かれる。彼は長じて、再び母なる大地の懷に帰ってきて、穏やかに周りとの調和しつつ生きる英雄となっている。社会のあり方の違いによって、求められる人物像のイメージの差が明確にあらわれているのが分かる。

(2) 女性たちの役割

金太郎伝説の中に登場してくる女性たちの存在はきわめて限られていて、ほとんど金太郎の母親となる山姥一人ということもできる。それに比して、「ペレドゥル物語」の中には、約 18 名の女性たちが登場している。母となるエヴラウクの伯爵夫人、恋人となる黄金の手のアンガラッド、コンスタンティノーブルの女帝、そしてカエル・ロイウの 9 人の魔女たち等、その役割もさまざまである。これらの女性たちが、若者の教育に手を貸して、一人の英雄が生まれるというのが、「ペレドゥル物語」のテーマとなっている。その様子を、いささか詳しく考えてみたい。

ペレドゥルの母

少年ペレドゥルは騎士になるという夢を追って母の手元を離れてゆく。考え深い母親が息子に与えた忠告は、いずれも切ない母の愛情を示している。母は何よりもまず、自分の生存を保障する食べ物や飲み物を獲得すること、危難の中にある人、特に女性を救助し、宝石は発見しだい他人に贈与して、評判をよくしておくこと、中世宮廷の愛の典型となっている、女性崇拝の恋愛を实践するようにと助言している。この母は、こうして最愛の息子の巣立ちを見送った後で、傷心のあまり命を落してしまったと物語は語っている。騎士としての価値観が、ここには現れている。

「いまや母親の言葉を離れるときなのだ」という、伯父の一人からペレドゥルに与えられた助言の持つ意味は限りなく大きい。男性の成長の過程においては、女性の世界からの離脱が必ず必要となるというウェールズ社会の考え方が、明確に現れている箇所である。こうして、母親の庇護のもとに過ごした幼い日々から、男性の社会へと見事に成長するため、少年ペレドゥルの修行の旅が始まる。

一方、日本の「金太郎物語」には、ペレドゥルのような成長は描かれておらず、彼の幼い日々の物語に終始し、あくまでも母親の愛息子にとどまる、愛らしい子どもの姿に焦点が当てられている。

カエル・ロイウの 9 人の魔女たち

若者ペレドゥルがこの魔女たちと出会うのは、物語の最初の部分、ペレドゥルの修行物語の中でのことである。

寄せ集めの武具と、投げ矢としての柁の木の切れ端しを手に、よれよれの駄馬にまたがり、ひたすら騎士という人たちに焦がれて、母親のもとを旅立った若者は、まず自分の伯父たちから、男性の社会で通用するような礼儀作法と、武器の使い方の手ほどきを受ける。その後、ある伯爵夫人の領地を荒らしていたカエル・ロイウの 9 人の魔女たちの城に、3 週間の間とどまって、馬の乗り方や武器の使い方を習うことになる。しかしこの時点ですでに魔女たちは、この男がやがて自分たちを滅ぼす者になることを予見している。最後の決戦で、魔女たちの予感どおり、ペレドゥルと彼を応援するアルスルの軍勢によって、魔女たちは全員殺されたと物語は語っている。ここには、いったんは英雄の修行に手を貸しながら、最後には当の英雄自身に滅ぼされてしまう女性たちの姿が描かれている。これは、命を与え、やがて表舞台から消えてゆくペレドゥルの母の姿と同じである。英雄誕生の過程においては、乗り越えなければならない、このような女性たちの存在が必ず必要とされる。頼光の家来として、大いに活躍した後、再び足柄山の母のもとに戻り、歴史の表舞台から忽然と姿を消してしまう「怪童」金太郎と違って、ウェールズの社会から飛び出して、広くヨーロッパ全域でさまざまな活躍をするのが、ウェールズの「怪童」ペレドゥルである。次にその華麗な変容ぶりを探ってみたい。

IV 「怪童」から「聖杯の騎士」へーペレドゥルの変容⁽²⁾

フランス系の「聖杯物語」は、フランダースのフィリップ（Philip）の宮廷で活躍したシャンパーニュ生まれの宮廷詩人クレティアン・ド・トロワの未完の韻文物語『ペルスヴァル、または聖杯の物語』（*Perceval ou Le Conte du Graal*）（c. 1182-3）がその代表的なものである。「聖杯の神話」自体が、このクレティアンが「発明」した文学神話と言ってもよい。この作品が未完であったため、その後のフランスでは、膨大な数の続編が生み出されていった。もともとは、単なる「器」として登場する「広口でやや深めの杯」を意味した古フランス語「グラアル」（'graal'）は、時が経過するにしたがって、至高の探求の対象、聖なる遺物「聖杯」となっていた。しかしクレティアンの作品の中では、この「グラアル」の探索の発端が語られているのみである。

クレティアンの『ペルスヴァル』の続編として書かれた4つの続編の中の、マヌシエ（Manessier）作の『第三続編』（*Troisième Continuation*）（c. 1230-35）で、初めて漁夫王によって「槍」はロンギヌスが十字架上のキリストを刺した槍であり、「グラウル」はそのときキリストの血を受けた杯で、それがアリマタヤのヨセフによってブリタニアにもたらされたのだと説明されている。

「聖杯」のキリスト教化を決定的にしたのは、ロベール・ド・ボロン（Robert de Boron）の『聖杯由来の物語』（*Le Roman de l'Eistoire dou Graal*）（c. 1200）の中でのことである。舞台は、新約聖書時代のエルサレムに設定され、主人公は、イエスの埋葬者になったとされるアリマタヤのヨセフである。かねてからイエスを慕っていたヨセフは、最後の晩餐でイエスが使用した杯を所有しており、イエスを埋葬する際、横腹から流れ出ている聖なる血を、この器で受けたと語られる。聖杯の守護者として定められたヨセフの一族によって、この聖杯は西方の世界にもたらされ、神と人との間で交された「旧約」の掟に代わる、「新約」の象徴となってゆくのである。ボロンの三部作の最後の作品では、この「聖杯」の守護が、ペルスヴァルに任されたということになっている。

この「聖杯探究の物語」を完成させたのは、ドイツのヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ（Wolfram von Eschenbach）の『パルチヴァール』（*Parzival*）（c. 1210）であった。全16巻24,694行からなるこの壮大な物語は、パルチヴァールの父の冒険と結婚、パルチヴァールの誕生から始まっている。かずかずの冒険を重ねた後、パルチヴァールは、自分の過ち、すなわち当然知るべきことを知ろうとはしなかったという知的怠惰と、相手の求めるものに気づかなかったという倫理性の不足に思い当たり、「聖杯王」アンフォルタス（Anfortas）に、「叔父上、どこがお痛みですか」という問いを発することによって、全ての問題が解決されるという結末を迎える。ここに登場してくる「聖杯」は、宝石である。それは、天使たちによって地上にもたらされ、人が望む飲食物を提供し、聖杯守護の任に当たる人々の当然知るべきこと、いのち、若さを保つ力を持った物体であった。この「石」の上に文字が現われて、神の意思が伝えられるということになっている。

時代が13世紀に入ると、多くの散文ロマンスが書かれてゆく。それらのロマンスの主人公が、アーサー王の宮廷の最高騎士ランスロット（Lancelot）となっているのも興味深いところである。その中には、『アーサー王の死』（*La Mort le roi Artu*）（c. 1230）も含まれている。聖杯の冒険で、円卓の騎士32人中の22人までが命を落とし、ランスロットと王妃の仲も再燃し、傷心のアーサー王は実の妹であるオルカニの妃との間に生まれたモルドレットとの決闘で、瀕死の傷を負い、異父姉モルガンの手によって船に乘せられて姿を消し、ログレス王国が滅亡する顛末が語られる。クレティアンの作品（c. 1180）から「アーサー王の死」（c. 1230）に至るまでの約50間に、ヨーロッパ各地で生まれた「聖杯伝説」の物語のかずかずは、その後のヨーロッパの歴史を予言するか

のような作品となっているのである。

その背景には、プランタジネット朝（Plantagenet, 1154-1399）初代のイングランド王ヘンリー二世（Henry II, 1135-89）とその妃アキテーヌのエレアノール（Eleanor of Aquitaine, 1122?-1204）の存在が見え隠れするのも興味深いところである。このヘンリーこそ、シャルルマーニュ（Charlemagne）の子孫を自認していたカペー朝（Capétiens, 987-1328）に対抗して、自らの王権の権威付けのために、アーサーと円卓の騎士の伝説を創り上げた人物であったからである。彼がジョフリー・オブ・モンマス（Geoffrey of Monmouth）という学僧に命じて書かせたと推定される、『ブリタニア列王記』（*Historia Regum Britanniae*）（c. 1138）は、その後の「アーサー王物語」の基礎を作ったラテン語の書である。ヘンリーは続いて、アングロ・ノルマン人の学僧ワース（Wace）に、このラテン語文献を、土地の言葉であるアングロ・ノルマン語で、物語化させている。こうして生まれたのが『ブリュ物語』（*Roman de Brut*）（c. 1154）であった。王の狙いは、王権の権威付けにアーサー王伝説を利用して、自らをアーサー王の正統的な継承者たる王として、イングランドの王位を確固たるものにすることであった。一方、妃のエレアノールは、アキテーヌ公ギヨームの孫娘である。フランス王ルイ七世と離婚したあとで、ヘンリーと結婚している。獅子王リチャードとジョンの母となり、フランスとイングランドのアングロ・ノルマン宮廷に、南仏のオック語圏の宮廷文化を導入した、12世紀後半最大の文芸庇護者の一人であった。二度の結婚によって、7人の子どもをもうけ、そのうちの3人が王となり、娘や孫たちを各国の支配者に嫁がせて、「欧州の母」と呼ばれている。東方の魅力にとりつかれ、たくさんの侍女たちを引き連れ、野営地で敷く絨毯、衣服、毛皮、宝石、料理道具一式を積み込んだ多くの荷車を従えて、ルイ王とともに十字軍の遠征にまで参加したこともある女丈夫であった。そしてヘンリーとエレアノールの娘たちが、嫁ぎ先の宮廷で、クレティアンなどのお抱えの詩人たちに、騎士や貴婦人たちを主人公にした多くのロマンスものを書かせている。

しかしながら、全ての物語の背景には、ウェールズのこの「ペレドゥルの物語」が存在していることは確かである。物語に登場してくる「平皿に載せられた首」（‘pen ar y ddysgl’）は、ウェールズの年代記に記録されている「ブリトンの長であり、楯であり、保護者であった」（‘pen a tharyan ac am diffyrwr y Brytanyeit’）、セウエリンの息子グリフィズ（Grufudd ap Llywelyn, d. 1063）であると指摘する学者たちもいる⁽³⁾。グリフィズこそは、1057年ごろにはイングランドに奪われてしまっていた、オッフアの堤防を越えた地方を奪還し、いっとき、唯一の君主として全ウェールズを統治した人物である。しかし義父に肩入れして、イングランドの内政に干渉したことで、ウェセックス伯ハロルドのウェールズ侵攻を招き、仲間のウェールズ人の裏切りによって首をとられ、ハロルドに献上されるという悲劇に見舞われる。一方、「白髪の男」（‘gwr gwynllwyd’）は、年老いたケナンの息子グリフィズ（Gruffudd ap Cynan, c. 1053-1137）であるとも考えられる。彼はウェールズ北王朝の祖キネッザ（Cunedda）とロドリ・マウル（Rhodri Mawr）の血筋を引くグイネッズ（Gwynedd）の王である。アイルランドへの追放、ノルマン人による幽閉という試練の末、イングランドのヘンリー王に対抗するような強力な指導者になってゆく。アイルランドとの関係を強化し、かの地の文学の伝統をウェールズに導入し、詩人たちを支援し、文芸の確立に力を注いだという。後年は盲目になり、息子を失って、失意のうちに亡くなる人物であった。『マビノギオン』の第三グループ「フランス風ロマンス」の成立にあたっては、このグリフィズの奨励を受けていたウェールズの詩人「ケヴァルウィッツ」（‘cyfarwydd’）たちの貢献があったとも考えられる。ウェールズ再興の夢を託しての、編纂と執筆の仕事が、宿敵ヘンリーの死（1135年）によって、一気に始まったと推定されるからである。

また、「マビノーギの四話」(‘Pedeir Keinc y Mabinogi’)の第二話で、脚に毒槍での傷を受けながら、生首となって旅を続けるブラン(Bran)の姿には、明らかに聖杯の守護者「漁夫王」のイメージが重なってくる。

以上見てきたように、一族の仇を討ち、奪われた先祖の土地を奪還する経緯を綴るウェールズの「怪童」ペレドゥルの物語は、その後さまざまな言語によって書き継がれ、それぞれの国で、独自の物語へと発展していった。こうして、ウェールズのペレドゥルの「復讐の物語」は、各国の独自の文学の中で、「聖杯探究の物語」となって、ヨーロッパの各地に広がってゆく。背景となった12世紀後半から13世紀にかけてのヨーロッパは、十字軍の遠征の結果としてもたらされた東方圏の文化の影響が色濃く現われてくる時代であり、宗教圏の分裂にともなって、それぞれの国が文化の多様性に目覚める変動期を迎えていた。ノートルダム大寺院等の大建造物が建てられ、パリ・ボローニャ・オックスフォードなどに大学が建てられている。このように、ヨーロッパ各地で、芸術や知的熱望の気運が高まってゆく時代であった。聖杯探求のロマンスは、まさにこのような大きな実験的、創造的な時代に、堰を切ったように生まれたのである。一方で、中世に文化の担い手となっていた女性たちの力は衰退し、世はそれまでの「声の文化」である口承文学から、「文字の文化」の読み物中心の時代へと移ってゆく。その狭間で生まれたのが、半分語り物、半分は読み物の性質を色濃く持ったロマンスとしての、「聖杯物語」の数々であったことが分かる。

17世紀から19世紀にかけて、封建制度が確立された江戸時代の平穏な社会と、近代化に躍起となっていた明治時代の社会で、庶民文化である各種の文芸の中に、愛らしい姿をとどめる日本の金太郎。12世紀から13世紀にかけて、ヨーロッパを席卷する膨大な文献の中に、その成長した勇姿をとどめたウェールズのペレドゥル。この二人の「怪童」の変容は、それぞれが誕生した社会と歴史を語る文化の指標となっている。

注

- (1) 使用テキストは、中野節子訳、徳岡久生協力、『マビノギオン——中世幻想物語集』(JULA出版局、2000年)による。()内の数字はページを表す。
- (2) ヨーロッパ各地の「聖杯伝説」に関しては、筆者もパネラーとして参加した、第24回日本ケルト学会者会議大会(2004年10月10日、慶応大学日吉キャンパス)のフォーラム・オン「聖杯伝説——その起原と展開を再興する」に負うところが大きい。
- (3) Alfred Nutt, *Studies of the Legend of the Holy Grail* (1888), Roger Loomis, *The Grail—From Celtic Myth to Christian Symbol* (1963), Glenys Goetinck, *A Study of Welsh Tradition in the Grail Legend* (1975) 等での指摘を参照。

参考文献

- 1 Bartrum, Peter C., *A Welsh Classical Dictionary*, The National Library of Wales, 1993.
- 2 Goetinck, Glenys, *Peredur – A Study of Welsh Tradition in the Grail Legends*, University of Wales Press, 1975.
- 3 Loomis, Roger, S., *The Grail – From Celtic Myth to Christian Symbol*, Columbia University Press, 1963, Constable, 1992.
- 4 Nutt, Alfred, *Studies of the Legend of the Holy Grail*, David Nutt, 1888.
———, *The Legends of the Holy Grail*, Long Acre, 1902.
- 5 Stephens, Meic, *The New Companion to the Literature of Wales*, University of Wales Press, 1998.
- 6 Weston, Jessie, *The Quest of the Holy Grail*, G. Bell & Sons, 1913, Dover, 2001.
- 7 江戸子ども文化研究会編, 『浮世絵のなかの子どもたち』, くもん出版, 1993 年。
- 8 くもん子ども研究所編, 『浮世絵に見る江戸の子どもたち』, 小学館, 2000 年。
- 9 新・講談社の絵本⑨『金太郎』, 講談社, 2002 年。(1935 年頃からシリーズとして出版された講談社の絵本の復刻版)。
- 10 日本昔噺第貳拾編『金太郎』, 小波作, 年英画, 博文館, 1896 年。
- 11 ベルンハルト・マイヤー著, 鶴岡真弓監修, 平島直一郎訳, 『ケルト事典』創元社, 2001 年。
- 12 ジャン・マルカル著, 金光仁三郎・渡邊浩司訳, 『ケルト文化事典』大修館書店, 2002 年。
- 13 ジェフリー・オヴ・モンマス著, 瀬谷幸男訳, 『ブリタニア列王史』, 南雲堂フェニックス, 2007 年。
- 14 高崎正秀著, 『金太郎誕生譚』, 桜楓社, 1971 年。
- 15 鳥居フミ子著, 『金太郎の誕生』, 晩誠出版, 2002 年。